

## 宮城県沿岸部の津波由来地名と 3.11 津波浸水域との対応関係

東北大学大学院工学研究科 学生会員 ○平川 雄太  
 東北大学災害科学国際研究所 正会員 佐藤 翔輔  
 元東北大学工学部 非会員 鹿島 七洋  
 東北大学災害科学国際研究所 正会員 今村 文彦

### 1. はじめに

地名は災害履歴や地形特性から命名されることが多く、中には津波災害を受けて名付けられた地名も存在する（以下、「津波由来地名」）。津波由来地名は、過去の津波の経験を後世へ伝える役割を担う媒体、すなわち「津波伝承知メディア」の一つとなり得る<sup>1)</sup>。しかし、地名の成り立ちやそこに込められた先人の思いを推し量ろうとする研究は個別的かつ局所的に行われており、その全容は整理されていない。

そこで本研究では、東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県沿岸部を対象に、個別的・局所的に行われてきた地名研究を整理し、津波由来地名の数や内容を把握するとともに、3.11 津波浸水域と比較することにより、津波由来地名の「津波伝承知メディア」としての可能性について考察することを目的とする。

### 2. 研究手法

地名に関する諸情報は刊行書籍より抽出した。まず刊行書籍のうち、①宮城県を対象としている、②津波災害と地名の関係について言及されている、という 2 条件を満たす、計 7 冊<sup>2)~8)</sup>を選定した。これらの書籍の中で、「津波に由来する」または「津波由来の可能性がある」と記述されている宮城県の地名を抽出し、地名・読み方・所在地・由来（地名に残されたメッセージ等）・出典をまとめたデータベースを作成した。ただし、過去の津波の経験を後世に伝えることへの地名の影響範囲は極めてローカルな範囲であることが想像されるため、町・大字以下の小領域における地名のみを対象とした。

次に、地理情報システムを用いて津波由来地名を地図上に表示し、さらに 3.11 津波浸水域を重ねることで、津波由来地名の空間分布、浸水域との対応を議論した。

### 3. 結果

刊行書籍より宮城県の津波由来地名を整理した結果、計 68 個存在していることが明らかとなった。いくつか例を表-1 に示す。様々な由来があるが、これらは「津波来襲に関するエピソードに由来する地名」（以下、「エピソード由来地名」）と「津波痕跡を示す音に由来する地名」（以下、「音由来地名」）に大別される。前者は津波来襲の際の津波の様子や、津波によってモノが流される様子が直接的に地名に反映されており、後者は津波によって形成された地形を表すものとなっている。

図-1 に、津波由来地名の分布と 3.11 津波浸水域を統合した結果を示す。地図中の色付き部は 3.11 津波の浸水範囲を示しており<sup>9)</sup>、赤色は「エピソード由来地名」が存在する町・大字、緑色は「音由来地名」が存在する町・大字、青色は津波由来地名が存在しない町・大字を示している。また図-1 の円グラフには、3.11 津波浸水域内における、各町・大字の数および割合を示している。さらに表-2 には石巻市牡鹿半島以北の「三陸地域」と、それ以外の「仙台平野」<sup>10)</sup>それぞれにおける町・大字数を示している。なお、図中の町・大字等境界データは総務省統計局の H22 国勢調査の調査区を基準に作成されたものであり、同町・大字に 2 つ以上の津波由来地名が存在している場合、地図上では一括りで表現されていることに注記する。表-2 より、「エピソード由来地名」

表-1 宮城県沿岸部に存在する津波由来地名の例

分類	地名	読み方	所在地	由来	出典
津波来襲に関するエピソードに由来する地名	大船沢	オオブネザワ	南三陸町入谷	津波の際に大きな船が沢の奥まで打ち寄せられてきたこと	太宰 (2012a), 太宰 (2013) 谷川 (2013)
	波伝谷	ハデンヤ	南三陸町戸倉	津波が反対側へと伝わる様子	遠藤 (2013)
津波痕跡を示す音に由来する地名	釜谷	カマヤ	石巻市	「カマ」は津波によって湾曲型に浸食された地形を表す	遠藤 (2013)
	赤沼	アカヌマ	利府町	「アカ」は水流による堆積物が垢のようにたまった地形を表す	遠藤 (2013), 太宰 (2013) 谷川 (2013)

キーワード：災害伝承，津波由来地名，東日本大震災，空間分布

連絡先：〒980-0845 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉 468-1 3F-E305

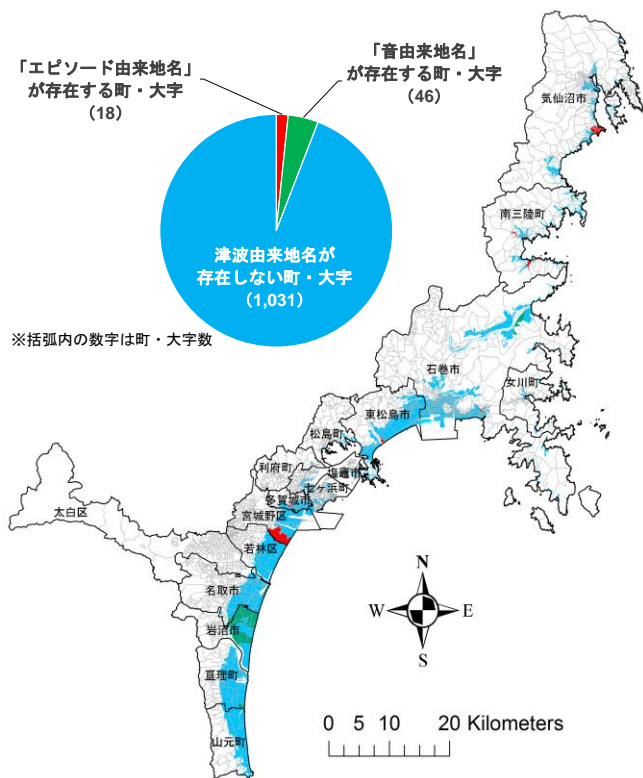


図-1 津波由来地名と 3.11 津波浸水域との対応関係  
および浸水域内における各町・大字の数 (上部)

表-2 津波由来地名有無の町・大字数 (浸水域内)

	「エピソード由来地名」が存在する	「音由来地名」が存在する	津波由来地名が存在しない	計	
宮城	石巻市牡鹿半島以北 (三陸地域)	13	18	277	308
	石巻市平野部以南 (仙台平野)	5	28	754	787
	計	18	46	1,031	1,095

(赤) の約 8 割は津波の来襲頻度が多い三陸地域に位置しており、過去の大津波の経験を受けて地名が成立した可能性を示唆している。一方、仙台平野においては、津波由来地名の多くは「音由来地名」(緑) である。この地域は過去にそれほど大津波を経験していないことから、津波以外の災害による似たような地形も同じ音で機械的に拾っている可能性が推察される。災害履歴を辿る等、地名の精査は今後の課題の一つである。

結果的に、今回抽出した 68 個の津波由来地名が存在する町・大字は全て 3.11 津波浸水域内に位置していることが明らかとなった。このことは、津波由来地名が「津波伝承知メディア」として機能していれば、東日本大震災の人的被害を多少なりとも軽減できた可能性を示している。一方で円グラフ (図-1, 上部) より、津波が浸水した町・大字のうち、津波由来地名が存在するのは非常に少なく、約 6%に過ぎないことから、地名による災害伝承、および人的被害の軽減が期待できる範囲は、東日本大震災のような極めて大きな津波に対し

ては限定的であると言える。

#### 4. おわりに

本研究では以下に示す結論が得られた；

- 1) 宮城県沿岸部には計 68 個の津波由来地名が存在しており、大きく「津波来襲に関するエピソードに由来する地名」と「津波痕跡を示す音に由来する地名」に分けられる。
- 2) 「エピソード由来地名」の約 8 割は津波来襲の頻度が多い三陸地域に位置しており、過去の大津波の経験や様子が直接的に地名に反映された可能性を示唆している。
- 3) 津波由来地名が存在する町・大字は全て 3.11 津波浸水域内に位置しているものの、それは浸水域全体の約 6%に過ぎず、津波由来地名が「津波伝承知メディア」として機能しうる範囲は、大津波に対しては極めて限定的であると言える。

謝辞：本研究は、平成 25-26 年度東北大学災害科学国際研究所特定プロジェクト研究・拠点研究 B「災害の記憶・記録に関する拠点間の連携を通じた災害アーカイブ学の探求」(研究代表者：佐藤翔輔)、および日本学術振興会 課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業・実社会対応プログラム「効果的・持続的な災害伝承を目的にした拠点構築手法のモデル化と実践的研究」(研究代表者：佐藤翔輔) の助成を受けた。ここに記して感謝申し上げる。

#### 参考文献

- 1) 佐藤翔輔・平川雄太・鹿島七洋・奥村誠・今村文彦：津波伝承知メディアが人的被害の軽減に及ぼす影響に関する一次的分析 -津波碑と津波由来地名に着目した東日本大震災の事例検討-, 第 34 回日本自然災害学会年次学術講演会講演概要集, pp.125-126, 2015
- 2) 太宰幸子：地名は知っていた 上巻, 河北選書, 2012a
- 3) 太宰幸子：地名は知っていた 下巻, 河北選書, 2012b
- 4) 遠藤宏之：地名は災害を警告する, 技術評論社, 2013
- 5) 太宰幸子：災害・崩壊・津波 地名解, 彩流社, 2013
- 6) 谷川健一：地名は警告する, 富山房インターナショナル, 2013
- 7) 楠原佑介：この地名が危ない, 幻冬舎新書, 2013
- 8) 高橋和雄：災害伝承, 古今書院, 2014
- 9) 東京大学空間情報科学研究センター：復興支援調査アーカイブ, <http://fukkou.csis.u-tokyo.ac.jp/> (参照 2015-12-10)
- 10) 国土交通省：東日本大震災の津波被災現況調査結果 (第 2 次報告), 平成 23 年 10 月 4 日公表, [http://www.mlit.go.jp/report/press/toshi07\\_hh\\_000056.html](http://www.mlit.go.jp/report/press/toshi07_hh_000056.html) (参照 2015-12-1)